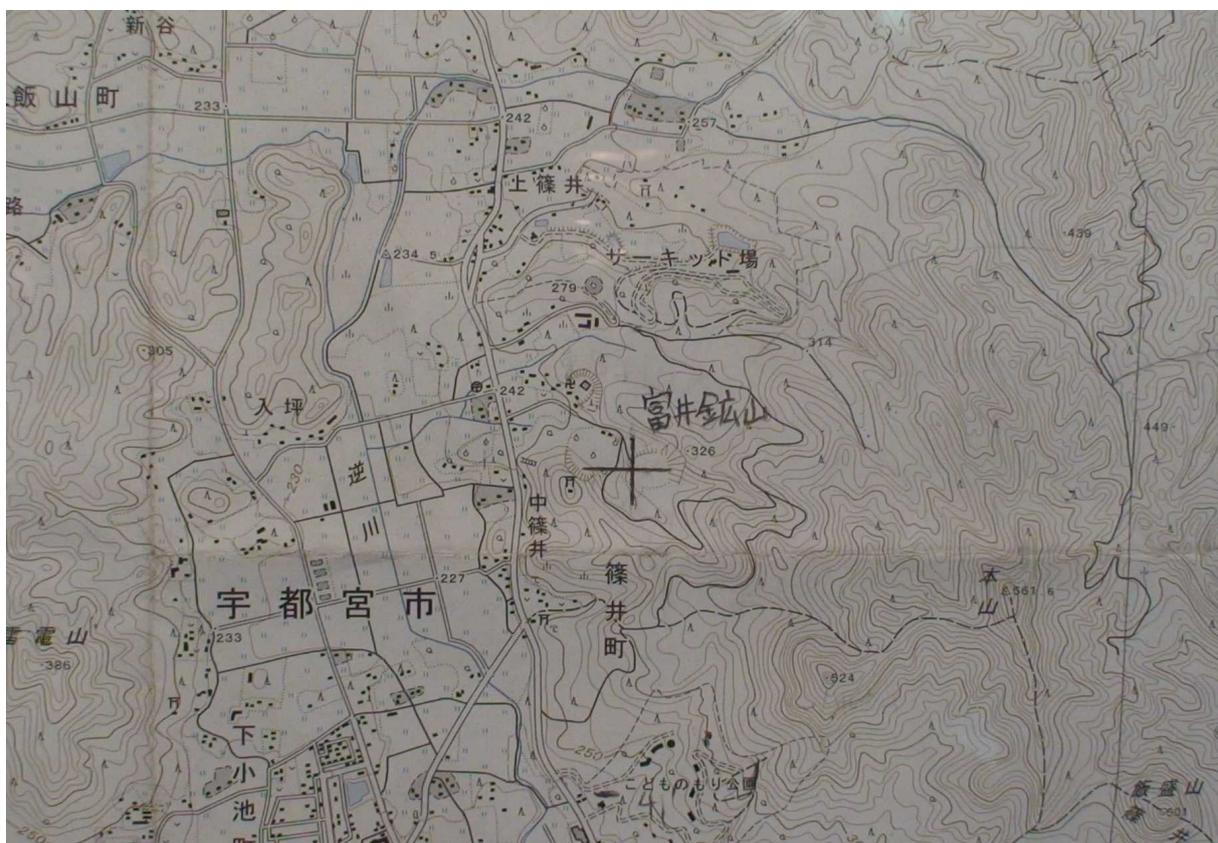


(8) 富井(とみい) 鉱山跡

参考文献(1)を手引きに、富井鉱山跡を探查しました。主要鉱石は江戸時代より金、その後、黄銅鉱、黄鉄鉱を主とし、輝蒼鉛鉱、閃亜鉛鉱、赤鉄鉱、白鉄鉱、自然金を産出したそうです。地図中の+印が富井鉱山跡の位置です。東経139.8218°=139°49'18"、北緯36.6934°=36°41'36"、高度=?(未定)。この場所には車でも行き着けます。広い原っぱ状となっています。東側が斜面となって、木立が生い茂っています。坑口跡などは全くわかりません。+印から東の方に進むと、鉱山の作業所などがあつたような地形が存在します。現場では偶に小さい黄鉄鉱がこびり付いた石英の塊が見つかることもあります。いわゆるズリは全く見あたりません。現場で、偶然であつた地元の年配の方の話です。廃鉱山になった後、安全のため、坑口などを爆破して閉鎖したそうです。その後、この場所は射撃場として使用されたが、別の地に射撃場ができたので、廃業し、現在はこの地は空き地となっているようです。鉱山稼働時には、「六方石(=大きな水晶)」が良く出たそうです。

地図で、サーキット場の南に位置している林道(行き止まりになっている方)を登っていくと、沢を渡ってから左手に砂防ダムがあります。「大同坑沢」という名札が取り付けられている。この沢の名前らしい。名前からすると、この沢のどこかに、かつて、坑道口があつたと思われる。この砂防ダムから沢に入って採集をした。少し紫がかった水晶もどき石英塊と、小さな水晶群に、緑色の銅の2次鉱物が付着したぶん黄銅鉱であろう微結晶が散在した塊を見つけた。この上の方に鉱脈があつたらしい。



地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図「下野大沢」

探查日 2009年3月、その他の日

参考文献

(1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店。114頁～117頁。

解説

参考文献(1)によると、この鉱山の主鉱物は江戸時代は金であり、当時の旧坑が各箇所にあるそうです。その後、昭和には銅を算出していたそうです。空き地などを注意して探すと、偶に石英塊があります。ハンマーで割ると、石英中に薄片状、微粒状の黄金色に輝く金属物が見つかります。光の当て方によっては少し緑がかることもありますので、黄銅鉱と見ました。

鉾山跡写真



地形図中の十字点から東の方を撮影。平らな原っぱの向こうは崖となっている。坑口があったらしい。



前述の崖の下に坑口らしい痕跡がある。



ダム銘板は「大同坑沢」。この沢のどこかに坑道があったらしい。それらしい箇所があるが、穴やズリは見あらず。砂防ダムの工事で消えてしまったのだろうか。

採集鉱物写真

品名 黄銅鉱 大した物ではないので無掲載

(8) 栃木県宇都宮市の富井鉞山一追記

富井鉞山については、本鉞山探査記で既報である。現地の現在の様相は、かつてここが鉞山であったのかを思わせるものは、殆ど失せてしまっている。が、富井鉞山は「紫水晶」を産出したことで知られているようである。鉞山が稼業していた時に、坑内から産出したものであろう。が、鉞山敷地外の場所でも紫石英擬きが採集できたことは、著者自身確認していた。既報の探査記で「大同坑沢」について触れていた。何度かこの沢を探査した結果、大同坑沢を登り上がった、本山の北面近傍に、多数の坑口跡、露天掘り跡を確認したので、富井鉞山の追記として報告をする。現地の状況から判断すると、これらの坑口等は、富井鉞山として開削されたものではなく、それ以前の時代に、金鉞山として掘られたもののようである。

現地への経路は次の通りである。宇都宮方面からならば、日光街道（119号）を北上し、進行方向が西向きになったあたりで、右折し、77号に入り北上していく。右折してから、大凡3km弱のあたり、左手にある郵便局の少し先で、道路左側にNTTの中継局、右手には登り気味の側道がある。この側道に入って行く。サーキット場を左手に見て、林道を直進していく。側道に入ってから大凡1km強のあたりに、広い空き地があり、車を駐車する。これより先は徒歩となる。

数年前、そして2015年4月探査

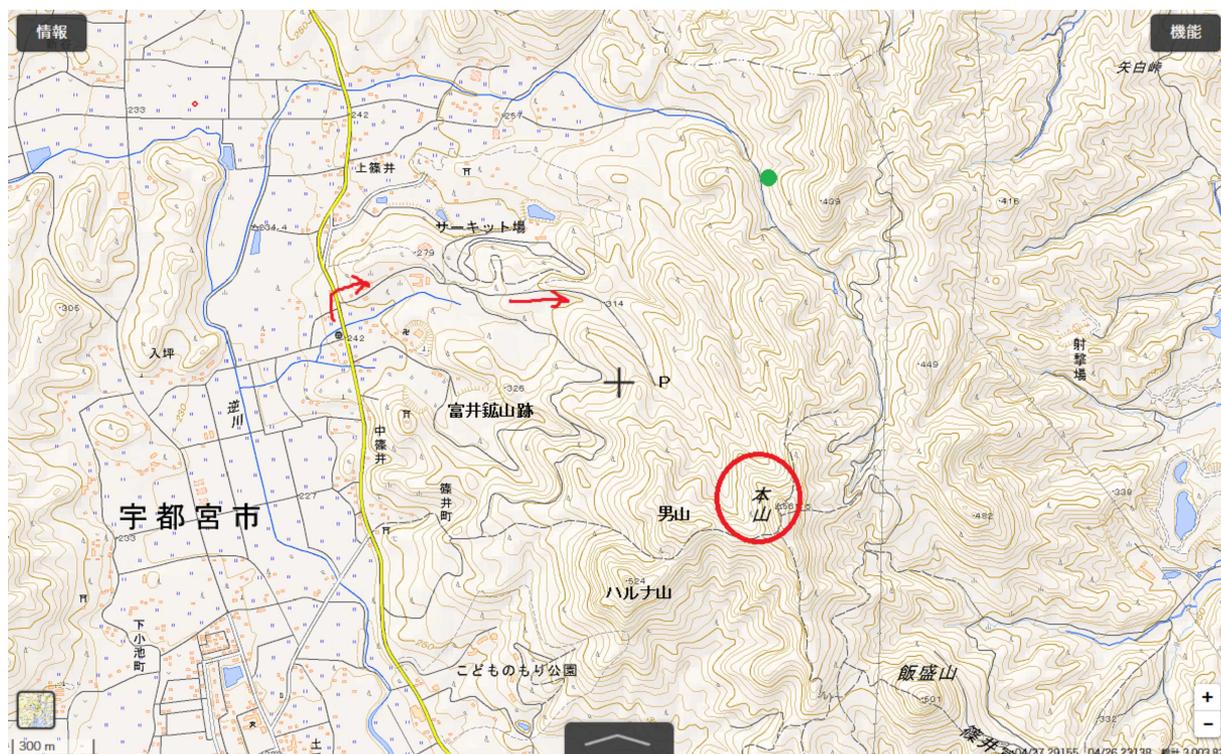


図1 国土地理院の地図サービスより複写掲載。「富井鉞山跡」、「ハルナ山」、「男山」の文字を書き足している。赤矢印が経路。その先の「P」は駐車場。大きな赤丸のあたりに多数の坑口跡がある。右上の付近で、黄緑色丸で示した、林道の直ぐ脇に、立派な坑口跡がある。林道を車で進んでいくと、左手にある。何のために開削したのであろうか？ 参考文献(1)の地質図を見ると、富井鉞山から東昭鉞山方向に、鉞脈が延びている。そのための坑口だったと思われる。と言うことは、この緑丸の付近に、何らかのズリがあると思われる。が、確認はしていない。東昭鉞山については、本探査記で既報である。

「本山」はハイキングコースに入っている。こどものもり公園から登っていける。この登山コースを辿り、「男山」と「本山」の尾根の中間付近でしっかりした坑口跡（後掲の写真で紹介）と、プラト一部擬きの箇所にある潰れたような坑口跡を見つけている。

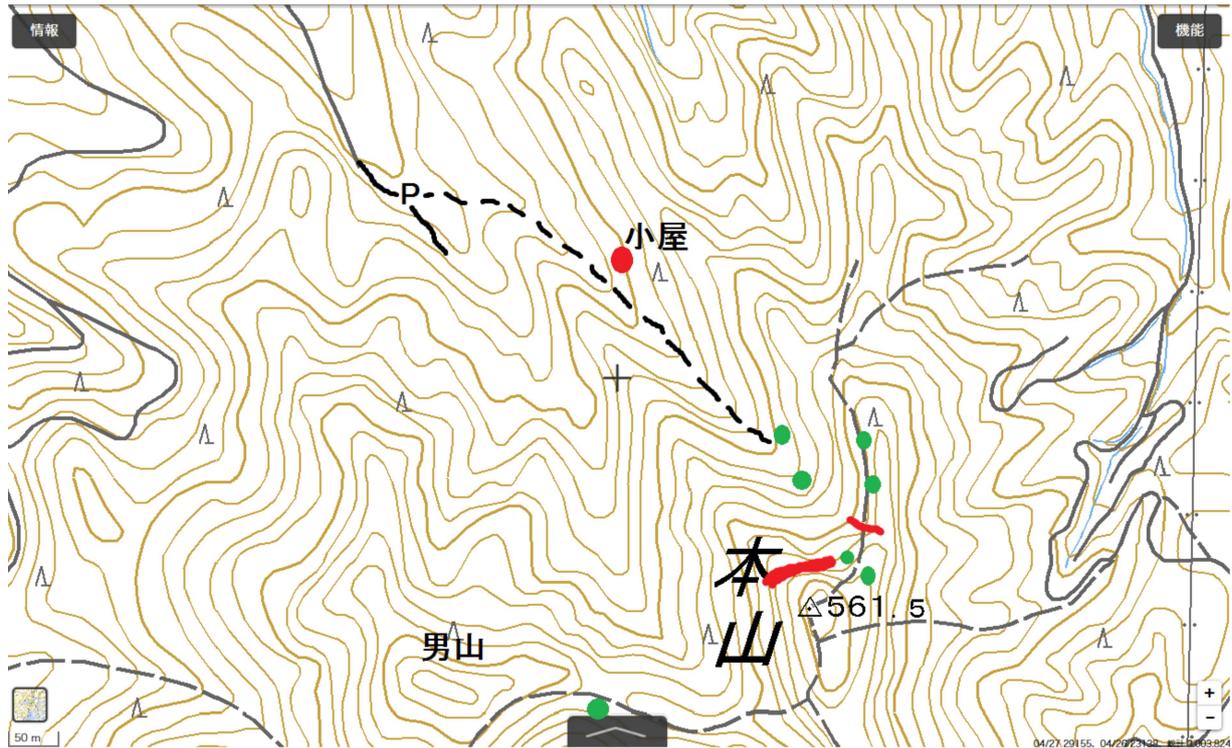


図2 図1の部分拡大図。Pは駐車場。ここから大凡のルートを書き入れている。明瞭な一本道があるわけではない。赤丸は廃屋（後掲の写真参照）。指標とはなる。沢に沿って登り上がるのが確実か。黄緑丸は確認した坑口跡。記録忘れもあったので、尾根上近傍にはもっとあったようである。赤線分は露天掘り跡。本山直下の露天掘りは一見の価値がある。
 これら坑口跡には、こどものもり公園からのハイキングルートで、「本山」への直前でルートを外れ、左手側に山裾を進めば、簡単に露天掘り跡にはたどり着ける。

鉱山跡写真



写真1 77号を北上してきた。左にNTTの中継局。右手には、コンクリートの側壁で見えにくい、側道がある。入口に「学校林入口」の看板が立っている。この側道に入っていく。



写真2 林道を登ってきた。図1, 2中の「P」の所である。このあたりに駐車ができる。この先で林道は2つに分岐している。左側が現地へのルートである。



写真3 写真2から少し先に進んだ。右からの沢と、正面からの小さな沢が合流し、1つとなって、正面林道の下を左に流れ下っている。正面の林道を沢に沿って進んでいく。この先の林道は、適当に分岐していたり、ブルドーザーで開削した林道が入り交じっている。現地への確かな経路は、沢に沿って登って行くことである。



写真4 沢を登ってくると、この廃屋は左手に見える。これは目印となろう。これより先、ブル道がジグザグに山の斜面に掘り開かれている。



写真5 沢を登ってきた。ブル道の終点でもある。プラトーの場所の山側に、「坑口の入口」を示している石垣組があった。なを、「真」の坑口跡は確認していない。入口の前に延びている木の太さが時間の流れを感じさせる。



写真6 写真5の坑口跡に向かって、右側の方にあった。潰れた坑口跡。



写真7 本山北側の尾根付近にあった坑口の1つ。この他に、幾つもの坑口があった。縦坑もあるので注意すること。



写真8 写真7で示した坑口の内部の様子。



写真8 「本山」頂上。大同坑沢を上り詰めて坑口跡に達し、大きな露天掘り跡まで来たならば、この頂上までは直ぐなので、登頂を勧める。この頂上には、こどものもり公園からのハイキングルートがある。登山案内書を参考にするとよい。



写真9 「本山」頂上の北側少し下にあった露天掘り跡。露天掘り部の西端より、東側を見る。幅は2 m前後、長さは100 m以上、深さは？



写真10 露天掘り跡の東端より西側を見る。白い部分は残雪である。付近にはプラトー部、そして坑口跡らしいのもあった。



写真11 こどものもり公園からの登山ルートで、「男山」と「本山」の中間付近の尾根にあった坑口跡。左下の黒い四辺形。鉱脈に沿って露天掘りしたようである。近傍の木に案内板があった。注意していれば、登山道から確認できる。

鉱物写真



写真 沢を登りながら探査をし、見つけた紫石英擬きの塊。中央の白っぽい部分。この先の上の方には、紫水晶があるのだろうか？

参考文献

(1) 「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。

追追探査

本富井鉱山は篠井鉱山とも称するらしい。鉱山に関する資料を収集している中に、この鉱山に関する他の文献にたどり着いた。その一つは「地下資源調査報告書 第2号、栃木県、昭和28年」である。この資料を文献(2)と呼称する。文献(1)は本論で参考文献(1)としているものとするからである。もう一つは「日本金山誌 第4編 関東・中部、1994年、社団法人 資源・素材編」である。この資料を文献(3)と呼称する。

本論では、主に文献(1)で「富井鉱山」名の記されている箇所の探査について報告した。それに続けた追記では、大洞坑沢を登り上がって、本山頂上付近の探査についての報告と、「こどものもり公園」から男山、本山までの探査についての報告をしていた。当時は文献(2)、(3)を持ってはいなかった。最近手に入れた参考文献(2)、(3)には本鉱山の鉱床図が掲載されていた。これらの文献を手引きに数回にわたって、現地の探査を行った。その報告を行う。

後掲している資料1の鉱山図1を、現在の地形図と対照する。鉱山図1では文字が少しづぶれて読み難い。キーとなった「本山」、「男山」、「大洞坑」、「第一通洞」、「第二通洞」の文字を赤色で書き加えている。三角法を用いて、大洞坑、第一通洞、第二通洞を現在の地形図中で確定した。資料2の鉱山図2には、大洞坑の北側に「宝生区」が記載されている。大洞坑のおおよその位置が確定できれば、宝生区の位置も確定できる。そしてその区の探査も行った。

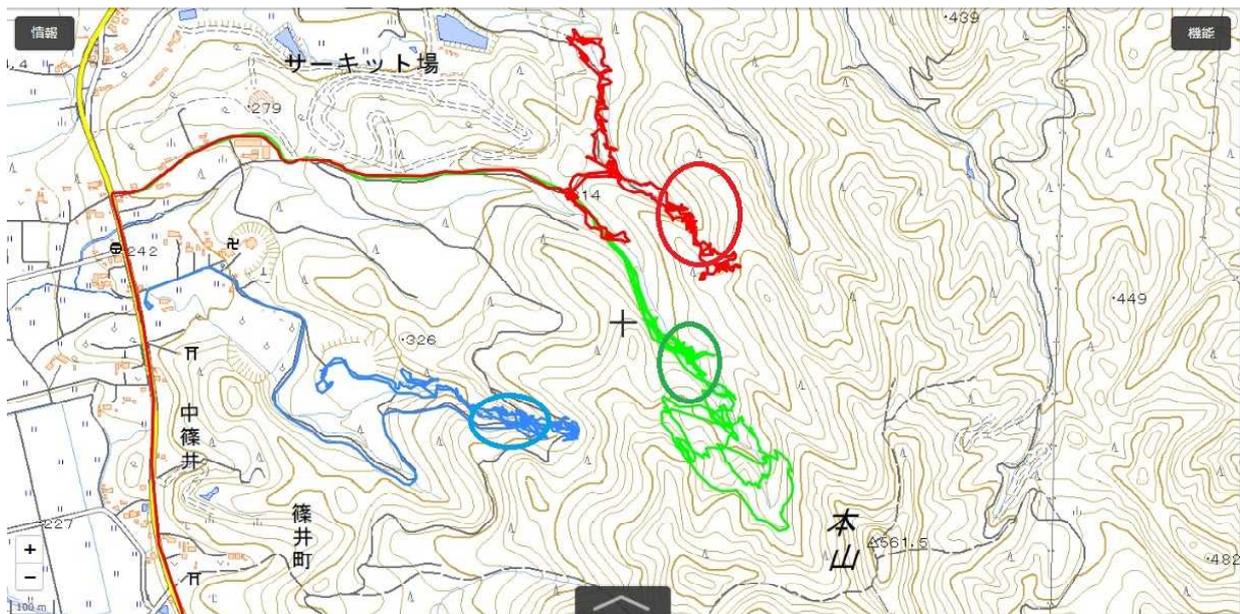
結果を羅列する。

(1) 本論で既に紹介した場所であるが、青色ルートでの探査で、第一通洞、第二通洞はわからなかった。が、青色ルートに書き加えた青色楕円の沢当たりには薄い黄鉄鉱の転石をまばらには確認した。が、青色ルートの最上部である沢の上部では見つけられなかった。青色楕円のあたりに第一通洞があったと思われるが、現地の土地改良などで、時とともに消えたのかもしれない。これは第二通洞についても言えよう。が、探し方が下手なのであったのかもしれない。なを、車は林道を進んで、青色経路の最標高付近に駐車させた。林道は舗装され、綺麗で確りしている。

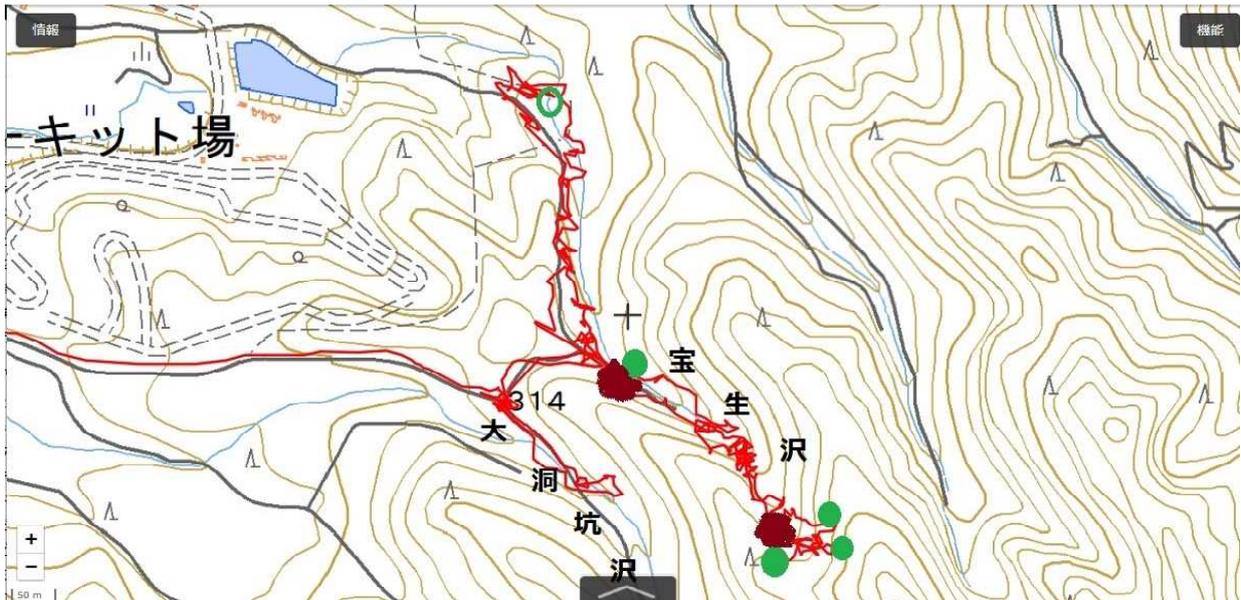
(2) 大洞坑は「大洞坑沢」の沢名があるので、緑色ルート上にあったことは確実である。が、大洞坑は今度も確認できなかった。追記の図に記入していた駐車地点Pの所であったのかもしれない。この箇所も林道の拡幅などで埋没したのかも。緑色ルートで示しているように、だいぶ上流まで歩き回って沢の探索をしたが、緑色楕円の当たり(駐車場所)で薄い黄鉄鉱の転石を見つけたくらいである。

(3) 赤色ルート上で、宝生区の鉱山跡を確認した。赤丸付近である。詳細は後述する。

探査日 2019年1月～2月



追図1 最近3回にわたって探査を行った。青色の経路が1回目、緑色の経路が2回目、赤色の経路が3回目である。



追図2 追図1の部分拡大図。「314」付近に駐車。進んできた林道の左手にある側道に進み、沢に沿って幾つかの坑口跡(黄緑丸)と、大きなズリ跡を2カ所(茶色ベタ)で確認。沢を下った先、図中の中央上部付近(黄緑円)、林の中の比較的平坦なところで、直径5m~6m、深さ3m程度の円形状の大きな陥没跡を確認。後掲の資料2を参考にすると、宝生大切坑に続いている坑道の陥没跡と思われる。とすれば、大切坑の入り口はこれより下流部にあるはず。しかし、一帯は整地されたようで、入り口は消滅したと思われる。なを、この沢の名称はわかっていない。「宝生沢」と仮称しよう。なを、沢は幅広いので歩き回るのに何の不安もない。

鉱山跡写真 宝生区の



追写真1 追図1, 2の「314」付近。この付近に駐車した。写真の右側が主林道で、大洞坑沢に沿っている。写真前方へ進んでいくと「宝生沢」に行ける。



追写真2 「宝生沢」を少し登って、左側にあった坑口跡。周りはスカズリが一杯である。雪が少し残っていた。下草、枝葉がなく、見通しは遠方まで良好である。冬期での探査では寒さと雪が心配になるが、遠方まで見通せる。一長一短か。



追写真3 前の写真で示した坑口の内部の様子。入り口は鉄格子で閉塞されていたが、カメラを差し入れての一樣。



追写真4 「宝生沢」をさらに登り上がった。上部に大きなズリ跡。その先には坑口跡があった。一帯ズリと転石だらけである。腰を据えて採集を行えば、良品を見つけることができるかも。



追写真5 前の写真のズリ跡の上の方にあった坑口跡。



追写真6 前の写真で示した坑口の内部の様子。



追写真7 沢のさらに上部の左側にあった坑口跡。露頭脈に沿って上方に斜面を切り開いたようである。

資料3 文献(3)より

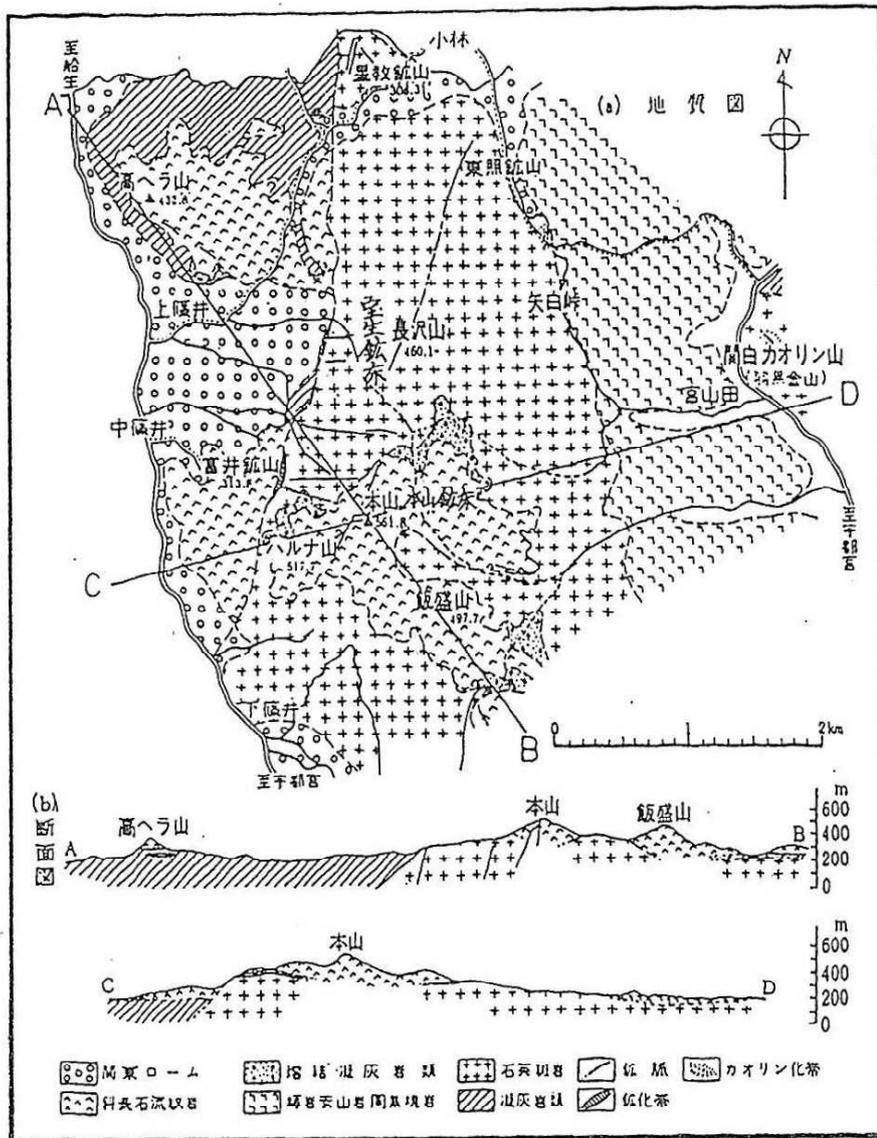
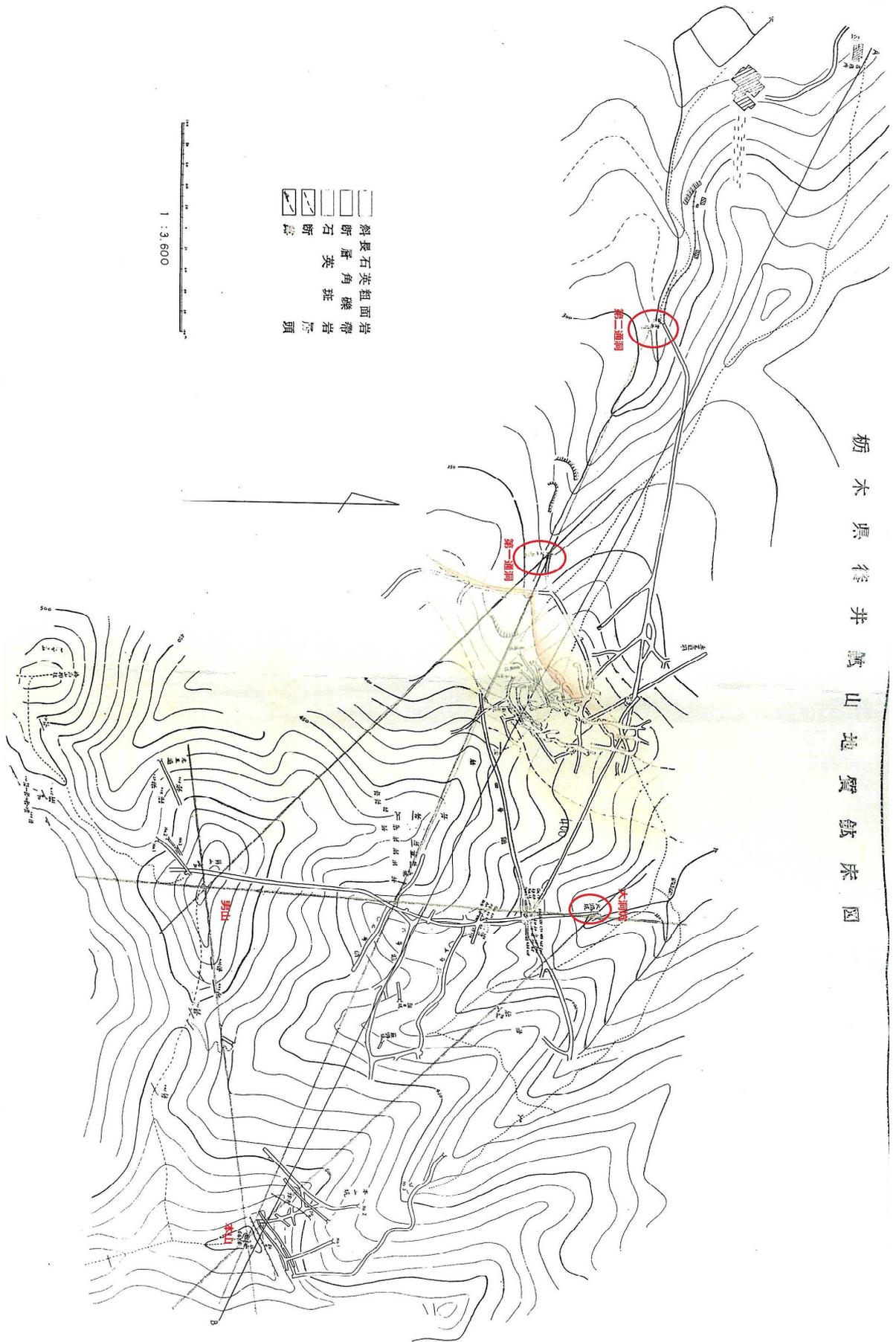


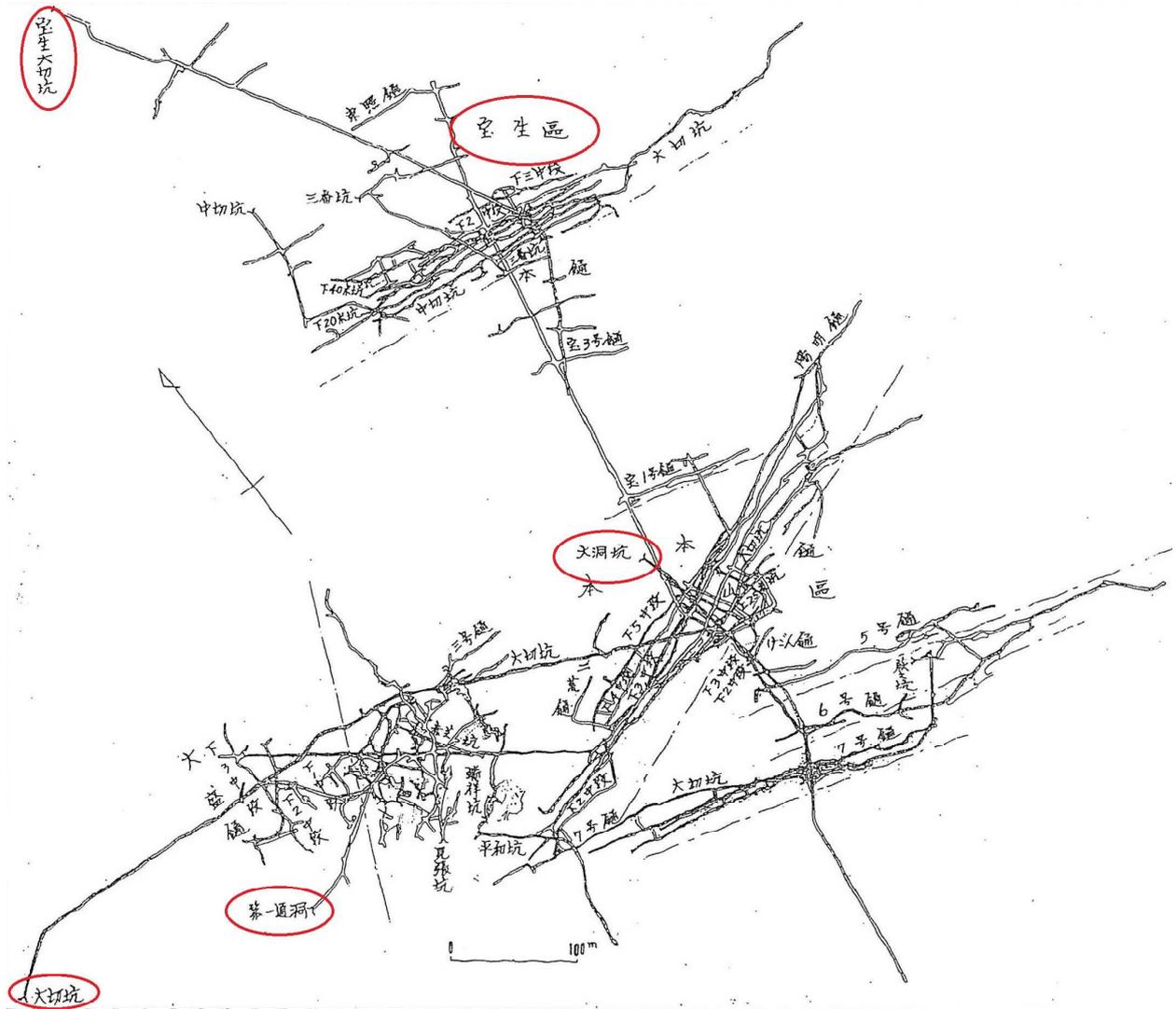
図22-1 富井鉾山付近地質鉾床図

(西原元男, 1964)

資料1 鉦山図1、参考文献(2)より



資料2 鉱山図2、参考文献(3)より



現在の地形図（インターネット経由で国土地理院のホームページで閲覧できる）と、資料1、資料2を讀者自身で対照して、探査を試みたらいかがでしょうか。ただ残念なのは、原本での図自体があまり綺麗ではなく、その複写の繰り返しのため、文字などが大分潰れてしまっていることです。どうしても気になるならば、原本の資料に当たるしかないでしょう。

参考文献

- (1) 「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店。
- (2) 「地下資源調査報告書 第2号」、栃木県、昭和28年
- (3) 「日本金山誌 第4編 関東・中部」、社団法人 資源・素材編、1994年。